

1. 講演

「東大理学部は基礎科学の面白さをどう伝えてきたか？」

岡村 定矩（理学系研究科長）

東大理学部は、基礎科学の面白さを伝えることにはそれほど積極的ではなく、論文を書くことが理学部の研究者にとって目的の第1位であったが、数年前から変化の兆しがでてきた。2000年4月まではホームページすらなかったが、2001年より広報委員会を強化し、2002年以降、理学部憲章の制定、公開講演会の開催、広報誌の刷新、広報担当職員の採用、記者発表マニュアルの制定、理学先端産業懇談会などの取り組みを重ねてきた。まだまだ足りないし、伝える側・伝えられる側のギャップ、伝えたい内容と社会に伝わっている内容とのギャップがあると思うので、今日は、基礎科学の面白さを伝えてこられた立花先生に教えを請いたい。



「基礎科学と応用科学の両方を見てきた人間として」

立花 隆（評論家）



現在の日本は恐るべく科学・技術に関心の低い社会になっており、基礎科学の面白さを伝えるということは絶望的に難しい。OECDのアンケートによると、日本人で科学に関心を持っていたり、科学を理解している人の割合は、世界の先進国中で最低である。自分も80年代半ばから十数冊のサイエンスものを書いてきたが、他の分野の出版物と比べて売り上げは1ケタ低く、この分野ではフリージャーナリストは生きていけない。またそれを載せるサイアスなどの科学雑誌もどんどんつぶれている。しかも、内容の質は落としたくないが、読者の水準に合わせて作らないと販売数が下がる。

日本がこうなった最大の理由は文部科学省の教育政策にあり、1958年と1998年を比較すると、理科の授業時間が小学校で628→350時間に、中学校で420→290時間に減ったことが影響している。また教育改革のたびに高校で理科の履修科目が減少しており、1980年代には生徒の80%以上が物理・化学・生物の3科目を取っていたのに、1994年以降、物理に至っては12%の生徒しか取らなくなった。しかも物理、化学の教科書は80-90%の内容が19世紀以前の発見をもとに書かれており(Tachibana, T., *Science*, v.281, 778-779, 1998)、「頭の中は中世」という人が多くなっている。これがマスコミで信じられないような内容が取り上げられる原因で、テレビなどの製作に関わっている人々の科学的知識はおどろくべく低い。また科学の話は社会の人に理解さ

れなくなっている。本郷では関心が低い、駒場では90年代半ばから授業についていけない学生が増えたので、理科の補習授業をやらざるを得ないという破産状態に陥っている。

私はこれまで120位の研究室を訪問してきたが、取材を受ける研究現場も日米で大きく異なる。日本では役人に説明して研究費を得ることに熱心だが、アメリカでは物事を分かり易く伝える訓練を受けている人が多く、メディアを利用して自己を表現していくことに長けている。日本人研究者は発信しても取材する側が乗ってくれない理由を、良く理解していない人が多い。あまりにも自己宣伝めいた記者発表をすると、取材する側は辟易してしまう。伝える側は何が分かったかを伝えようとするが、聞く側は何が分かっているかを知りたいと思っており、ギャップが存在する。日本人は分かっていることをあまり云いたがらないが、概して一流の人ほど何が分かっているかを伝えてくれる。この分からないことを分かってもらうモチベーションをどう伝えるかが大切で、その情熱が伝わらないとだめなのでないか。

発見にたどり着いた喜びやカタルシスを、物語として伝えられるかどうか、面白さを伝えるということだが、それができる人はきわめて少ない。私は、発見に至った幾つかのコンテクストを脈絡付けて並べ、聞いている人に「ハハーン分かった」と知らせるといった役割を担ってきたが、どのようなイメージを伝えれば読者に分かってもらえるかの言い回しを見つけることが、最も難しいことである。

2. パネルディスカッション

パネリスト	立花 隆（評論家）／岡村 定矩（天文：教授・理学系研究科長） 佐藤 勝彦（物理：教授・前理学系研究科長）／福田 裕穂（生物科学：教授） 平木 敬（情報理工：教授）／尾関 章（朝日新聞大阪本社科学医療部長：科学ジャーナリスト）
司会	浦辺 徹郎（地惑：教授・広報委員長）
質問司会	倉本 由香利（物理：大学院生）

浦辺：パネリストの皆様、立花先生のご講演に対しどのような感想をおもになりましたか？

佐藤：科学の面白さを伝えるに当たって、客観的な難しさがあることがよく分かった。また自分たちが伝える場合でも、それが易しいことではないので、どうすればよいか後で発言したい。

福田：私も学校教育の問題を考えてきたが、中等教育に大学の先生がもっと関わるべきと考えている。

平木：学問分野の進展は、世界史の中でどの国が覇権を持っていたかということとも関係しており、そのな

かで科学を考えていくべきだ。

尾関：立花さんの話をつらい気持ちで聞いていた。立花さんが「百億年の旅」の連載をされていたときに、サイアスの編集を担当していた。何とかして科学雑誌を再建したいと願っているが、そのためにもどのような事をすれば良いかということをお話したい。

浦辺：伝えたい側と、受け取る側のギャップが大きいということですが・・・

立花：自分は科学について書いてきたが、いろいろ反省することがある。最初は素朴な疑問を持って

いたが、次第に研究の現場に近くなってしまい、最近は専門的には正しいかもしれないが、一般の人からみると分からないことを書いているのでないか。研究者の方も、ごく一般的な人に自分の研究内容を専門的な用語を使わずにしゃべって説明して、持っているイメージを伝えられるかどうか試してみる必要があるだろう。

倉本：ここで会場の方からの質問を紹介します。立花先生への質問です。「私自身サイエンスについて書く仕事をしているが、正確さと分かり易さがぶつかってしまう場